

宮城与徳訪日の周辺—米国共産党日本人部の二つの顔

加藤哲郎（一橋大学名誉教授・早稲田大学客員教授）

1 20年前の尾崎秀樹による宮城与徳論の問題点

ゴルゲ事件に関与したとして検挙された日本人のうち、尾崎秀実に次ぐ重要な役割を果たしてきたとされるのは、画家の宮城与徳である。宮城について、かつて日本のゴルゲ事件研究を主導してきた評論家尾崎秀樹は、広く読まれた『ゴルゲ事件』（中公新書、1963年）、『越境者たち』（文藝春秋、1977年）などで、宮城与徳の在米時代と日本への派遣の問題を追いかけ続けた。それらを踏まえて述べられた、1990年の尾崎ゴルゲ事件50周年記念講演「未完の画家・宮城与徳の場合」では、以下のように記されている。ちょうど東欧革命から冷戦が終焉し、沖縄では画家としての宮城与徳を顕彰する遺作展が開かれた頃のことである（『宮城与徳遺作展報告集』1991年）

今年（1990年）の10月に沖縄で宮城与徳の遺作展や講演会などをやりましたので、その報告かたがた、宮城のことを話します。……宮城は名護で生まれたのですが、尾崎・ゴルゲ事件で逮捕されたということで、戸籍からも消されてしまいました。そののち沖縄戦で焼け野原になってしまい、役場にあった戸籍簿も焼けてしまいます。……尾崎・ゴルゲ事件も来年で、逮捕から50年になります。事件の歴史的評価を見直そうという機運も、ある面では進んでいますが、依然として「ゆがみ」というべきものが残っています。現在の政治状況の中では、その「ゆがみ」を一層大きくしようとする傾向があります。これを少しでも押し返して、犠牲者の復権を図ろうというのが、遺作展の意味です。大きな反響があり、たいへん嬉しく思っています。（「国家機密法に反対する懇談会だより」No7 1991年11月7日、

http://homepage2.nifty.com/ikariwoutae/starthp/ozaki_mivagi.htm)

この尾崎秀樹の話の主観的意図は、リヒアルト・ゴルゲや異母兄尾崎秀実を含む「ゴルゲ諜報団」全体の名誉回復を願ってのものであろう。「ゆがみ」を正していく努力は、今日でも必要である。ただしそれが、対独戦争で苦況にあった旧ソ連に日本軍南進情報を伝えて結果的に「社会主義ソ連」を救いその存在を半世紀延命させたという「ソ連のスパイ」であったことの開き直りでは、旧ソ連の結末を知る21世紀の人々には、説得力を持たないだろう。また、「ゆがみ」を正そうとして、ある人物の名誉を守るために他の人物を虚偽告発しその人権を侵害したりする場合には、別の「ゆがみ」が生まれるであろう。以下、私は、尾崎秀樹の20年前の宮城与徳論を、冷戦崩壊後に飛躍的に進んだ第一次史料の発掘、世界の新研究に照らして、検証してみようと思う。

尾崎秀樹の20年前の講演は、「生まれ故郷での遺作展に大きな反響」「宮城のアメリカでの活動」「日本での活動」「宮城の逮捕と残された問題」から成る。生い立ちと沖縄との関わりや、「宮城の行動は日本に反戦の組織がないなかで、必死に日本の侵略を止めようとした反戦活動といえます。長いあいだ宮城は、沖縄でも本土でも、ゴルゲ事件の犠牲者というだけにとどまった評価しかなかったのですが、彼のアメリカ時代からの行動を見てきますと、けっしてなまやさしいことではなか

ったと思います」という結語は、それなりに意味がある。「ソ連のスパイ」に留まらず、「反戦反ファシズムの闘士」としての宮城与徳のイメージである。

ただし、その論証のプロセスで、(1) ゴルゲ事件発覚の端緒を、北林トモ逮捕につながったとする伊藤律の供述に求めていること、(2) 宮城の活動や人間性の評価について、川合貞吉の証言に主として依拠していること、(3) 宮城をアメリカから日本に派遣した重要人物「ロイ」について、野坂参三であったとしていること、(4) 宮城をアメリカ時代からの優れた共産主義者として評価したためか、当時のアメリカ共産党日本人部の活動について、特高警察に強いられた宮城与徳手記をそのまま用いて説明し評価していること、といった問題がある。

宮城与徳を主人公にして生涯を論じた唯一の評伝、野本一平『宮城与徳』（沖縄タイムス社、1997年）も、冷戦崩壊・ソ連解体時にまとめられた尾崎秀樹の見方を、基本的に踏襲している。(1)の伊藤律端緒説については、渡部富哉『偽りの烙印』（五月書房、1993年）に従い改めたものの、その他の点では、尾崎秀樹の研究の誤りを基本的に踏襲している。

2 ゴルゲ事件の日米露3つの物語と冷戦崩壊による資料状況の刷新

報告者はもともと、ゴルゲ事件の専門家ではない。「情報戦」という観点から20世紀の歴史を見直している政治学者である。沖縄との関連では、旧ソ連におけるスターリン粛清の日本人犠牲者を追いかける過程で、アメリカ西海岸のアジア人労働運動を指導していた沖縄出身の日本人、1932年ロングビーチ事件で旧ソ連に亡命した又吉淳、宮城与三郎（与徳の従兄）、照屋忠盛、山城次郎、島正栄らの粛清の記録を発掘してきた。1999年冬にそうした記録をご遺族にお渡しするため沖縄に来た際には、沖縄の新聞で大きく報じられた。またちょうど10年前、2001年に故国場幸太郎氏らの非合法沖縄奄美共産党資料を発掘・公開した際にも、大きなシンポジウムが開かれ、『琉球新報』『沖縄タイムス』に寄稿したことがある。しかし、ゴルゲ事件については、毎年11月7日前後に開かれる日露歴史研究センターのゴルゲ・尾崎墓前祭等での講演を除けば、もっぱら他の問題の研究に見つかる関連資料を白井久也氏らに提供し解説する役割で、ゴルゲ事件の歴史的意義や宮城与徳の諜報活動について、専門的に研究しているわけではない。

ただ、宮城遺作展・尾崎講演のもたれた冷戦崩壊時にモスクワの旧ソ連コミンテルン文書館の秘密資料に接し、21世紀に入ってからには米国国立公文書館、ドイツ連邦公文書館、英国国立公文書館、スウェーデン国立公文書館、中国の地方档案馆などで現代史資料を収集・解読する過程で、20世紀に尾崎秀樹らにより進められてきた既存のゴルゲ事件研究には、大きな疑問を持った。昨2010年4月、ロシア大使館で開かれた公開講演会で話し、私のウェブ個人HP「ネチズンカレッジ」に入れた「ゴルゲ事件の3つの物語」(<http://homepage3.nifty.com/katote/SorgeRus.pdf>)に述べてあるが、ゴルゲ事件への関心、事件の語りは、日本、米国、ロシアで大きく違う。舞台も主役も、対象時期も論点も異なる。日本では尾崎秀実が主役、舞台は東京であるが、ロシアではゴルゲの1941年の東京とモスクワを結ぶ無線通信がポイントになる。アメリカではむしろ、ゴルゲや尾崎秀実の上海時代、それも1930年代初めのアメリカ人アグネス・スメドレーとゴルゲ諜報団の結びつきが焦点になる。そのため20世紀には別々に研究が進められた。現時点では、ナチス・ドイツと軍国日本の関係資料の精査にもとづく、イギリスのディーキン＝ストーリィの研究（河合秀和訳『ゴルゲ追跡』筑摩書房、1967年、岩波現代文庫、2003年）が最も学問的に信頼できるものとなっている。

20世紀の日本で尾崎秀樹らが描いたゾルゲ諜報団＝ラムゼイ機関のスパイ物語は、みずず書房から出ている『現代史資料』1-4、つまり戦時中の国策裁判記録の枠を出ておらず、国際的事件について日本側官憲史料を基本資料とし無批判に用いている点で、学問的には問題が多い。ようやく冷戦崩壊後に、故石堂清倫、白井久也・渡部富哉氏ら日露歴史研究センターの尽力によって見直しを開始され、東京（1998年）、モスクワ（2000年）、ドイツ・オツツェンハウゼン（2002年）、モンゴル・ウランバートル（2005年）、アゼルバイジャン・バクー（2008年）と5度の国際シンポジウムを通じて、研究ネットワークを築き始めた。私自身は一度モンゴル・シンポに参加し報告した。

アメリカでは、1949年2月10日の陸軍省発表、いわゆるウィロビー報告が、今日でもベースになっている。米国で書物として出版される際のタイトルが『上海の陰謀』The Shanghai Conspiracy（福田太郎訳『赤色スパイ団の全貌』東西南北社刊、1953年）であったように、東西冷戦の始まり、中国革命、朝鮮戦争、アメリカにおける「赤狩り」マッカーシズムの開始が背景になっていた。だからこそ、ゾルゲ・尾崎と米国人スメドレーのつながりがクローズアップされ、また宮城与徳がアメリカ共産党員だった事実——非米活動——に注意が促された。当時の日本共産党に打撃を与えるために、ゾルゲ事件の発覚は、もともと戦前特高警察の創作したシナリオに沿って、戦後日本共産党の指導幹部になっていた伊藤律が北林トモについて供述したという説が採用された。それは占領軍GHQによる効果的な情報戦だった。事実、尾崎秀実の異母弟尾崎秀樹は、上海時代のスメドレーを知る生き残り証人としてウィロビー報告に重用された川合貞吉と共に、伊藤律を「生きているユダ」として告発を始めた。日本共産党の中からも、伊藤律を「スパイ」と疑うグループが生まれ、1950年1月、いわゆるコミンフォルム批判により明確になる共産党分裂の一因となった。

冷戦のもう一方の当事者、スターリンのソ連は、ゾルゲ事件について沈黙を続けた。ところが日本で1962年からみずず書房『現代史資料』の裁判資料が公開され、アメリカでウィロビー報告とは異なる観点のチャーマーズ・ジョンソンの研究が現れた頃（萩原実訳『尾崎・ゾルゲ事件——その政治学的研究』弘文堂、1966年）、突如として「大祖国戦争」でのリヒアルト・ゾルゲの諜報活動を賞揚し、1964年11月5日には「ソ連邦英雄」に祭り上げ「名誉回復」をはかった。ただしそれは、旧ソ連でスターリン批判と平和共存を主導したニキータ・フルシチョフの失脚、キューバ危機から米ソ冷戦の深化、中ソ対立という新しい国際情勢にあわせたソ連諜報機関（KGB/GRUなど）強化のシンボルにゾルゲが採用されたもので、ソ連側の所蔵する関係資料公開は限られたものであった。

ちょうど尾崎秀樹が沖縄で宮城与徳を論じた1990年頃、冷戦崩壊とソ連解体によって、旧ソ連秘密資料の本格的公開が始まる。ゾルゲが日本からモスクワに送った実際の暗号電文等、拷問を含む日本官憲の強要による尋問・手記などとは異なる事件の実像を、学術的に研究する条件が生まれた。

ゾルゲやマックス・クラウゼンの育ったドイツでは、冷戦時代は東西に分割され、ゾルゲ事件はもっぱら東ドイツでソ連の「名誉回復」にあわせたユリウス・マダーの研究やウルズラ・クチンスキーの回想（ルート・ヴェルナー『ソーニャの日記』）を通して流布されたため、いまだに旧西独の流れから本格的な研究が現れる状況にない。ただしハイデルベルグ大学中国史のトマス・カンペン教授が上海時代のゾルゲを精力的に追っており、その一部は日露歴史研究センター『ゾルゲ事件関係外国語文献翻訳集』に翻訳され、日本語でも読めるものとなっている。

冷戦崩壊は、日本の裁判資料に続く旧ソ連のゾルゲ事件関係秘密資料のみならず、ゾルゲ事件の実像を21世紀に読み解く、新たな史資料的条件をもたらした。米国では、旧ソ連が持っていたアメ

リカ共産党関係の記録が議会図書館等で公開され、宮城与徳の所属したアメリカ共産党日本人部についても、その実像を解明しうるようになった。また私の本来の専攻領域であるが、ウィロビー報告の背景に、第二次世界大戦から敗戦後の日本・ドイツについての米国国務省、OSS/CIA等諜報機関、陸海軍諜報部MIS/ONI、連邦捜査局FBIなどによる調査・分析記録が大量に公開され、そこから当時の日独露米英中の情報戦、つまり日独伊枢軸国内にも、米英ソ中連国内にも見られた疑心暗鬼、それらの国々の内部における政府・軍・情報機関内の抗争をも明らかにしうる史資料が、最新のメディアであるインターネットやデジタル画像・映像をも駆使して利用できるようになった（加藤「戦後米国の情報戦と60年安保——ウィロビーから岸信介まで」『年報 日本現代史』第15号、現代史料出版、2010年 <http://members.jcom.home.ne.jp/katote/nenpo2010.htm>）。

尾崎秀樹の時代には想像もできなかったことであるが、今日では、米国公文書館、英国公文書館、ウェブ上のコメンテルン電子アーカイブス、日本でも国会図書館所蔵のGHQ資料・在米日系移民資料などで、関連資料をキーワードで簡単に検索できるようになった。英国国立公文書館や日本のアジア歴史資料センターの場合は、所蔵資料の多くを直接デジタルファイルや画像でダウンロードし、自宅で見ることができる。そんな手法で、私が収集した第一次史資料にもとづいて、以下、ゾルゲ事件と宮城与徳の役割に関わる限りでの新知見を述べてみたい。

3 伊藤律端緒説の崩壊——憲兵隊もゲシュタポもソ連赤軍もゾルゲを疑っていた

渡部富哉『偽りの烙印』の画期的意義は、伊藤律検挙前から特高警察によって北林トモが既にマークされ監視されていた事実を、日本の官憲史料の批判的読解、つまり裁判資料のもととなった警察・司法資料の徹底的な再検証によって明らかにし、伊藤律を「生きているユダ」に仕立て上げた国家権力の狙いを見抜いたことであった。すでに今日では、事件を知ろうとする多くの人が最初に参照するインターネット上の百科事典「ウィキペディア」日本語版でも、渡部氏がモスクワで発掘した内務省警保局「特高捜査員褒賞上申書」にもとづき、日本の特高警察のゾルゲ事件捜査開始は「1940年6月27日」と記されている（<http://ja.wikipedia.org/wiki/ゾルゲ事件>）。尾崎秀樹の研究の原点ともいべき伊藤律供述端緒説は、完全に崩壊している。

では、「事件」はなぜ、どこから発覚したのか。この点は、宮城与徳から尾崎・ゾルゲへと連なる北林トモ1941年9月27日検挙のきっかけを直接追いかけるよりも、ゾルゲ諜報団全体が、1941年10月にはほぼ出口なしになっていた状況のなかで見た方がよい。

例えば特高警察（内務省）のみならず、陸軍憲兵隊も、銀座数寄屋橋際のレストラン・ローマイヤーの憲兵隊外事課による監視と、憲兵隊司令部直轄無線探査班の怪電波探知からゾルゲに目をつけ尾行していたが、在日ゲシュタポ代表マイジンガー大佐によるゾルゲの身分保証で、尾行を中止していた。『日本憲兵正史』は、「結局、憲兵隊ではゾルゲ一味逮捕の名を警視庁にとられた。だが、憲兵隊も実はもう一步のところまでゾルゲを追詰めたが、マイジンガー大佐の保証を信頼したばかりに、網中の大魚を逸してしまった」という（1976年、683頁）。

このゲシュタポ・マイジンガー大佐による日本側への密告が大いにありえたことは、今日ではいくつもの第一次資料で裏付けられる。1941年4月に日本に赴任する前、ヨゼフ・マイジンガーは、ナチス親衛隊（SS）でユダヤ人弾圧の先頭に立つ「ワルシャワの殺人鬼」であった。その日本での任務の一つが、ナチスへの忠誠が疑われる、在日ドイツ大使オットお気に入りのジャーナリスト・

ゾルゲの身辺調査にあったことは、ナチス秘密機関長シェレンベルグの戦後の手記で知られ、尾崎秀樹『ゾルゲ事件』でも言及された。今日では、その詳細が、英国国立公文書館書所蔵の当時の在日ドイツ大使館とドイツ外務省およびリッペントロップ事務所との往復文書によって、裏付けが得られる（ディーキン＝ストーリィ『ゾルゲ追跡』冒頭のゾルゲ逮捕当時の在日ドイツ大使館内部の混乱の詳しい描写は、典拠は明記されていないが、この数百頁の英国所蔵第一次史料解読によるものであったことが、私の複写した資料から裏付けられる）。また、私が昨年米国国立公文書館で見つけたMIS（米国陸軍諜報部）「マイジンガー・ファイル」からは、マイジンガーが情報収集に用いた日本側内務省・軍情報関係者の名前も判明した。ゾルゲがマイジンガーを飲み友達にして丸めこまなければ、ナチス・ドイツ側の告発と日独同盟によっても、ゾルゲ諜報団は壊滅寸前だった。

私自身は、もう一つ、ソ連側のゾルゲに対する不信によっても、ゾルゲのソ連への帰国命令、ソ連での逮捕・処刑がありえたと考えている。それは、事件発覚当時の在日ソ連大使館書記官、実は粛清全盛期の赤軍諜報部でゾルゲ監視係りであったビクトル・ザイツェフが1940年来日したこと、そのソ連大使館員がゾルゲと直接会い活動費の現金授受まで行っていたことである。当時の在日ソ連大使館員が日本の特高外事警察にどのように徹底的にマークされていたかは、日本の外務省外交史料館にあるソ連大使館監視資料で分かる。大使館の日本人雇用者の中にスパイが送り込まれ、大使館員がだれといつ会ったか、日本人訪問者等は刻々報告されていた。外出のさいは、当然尾行がついた。その在日ソ連大使館員と、日本の同盟国ナチス・ドイツの在日大使館に出入りするゾルゲが東京で密会するのは、ほとんど自殺行為であった。中国・シベリアなど他の連絡ルートが困難になっていたとはいえ、なぜソ連赤軍第4部がそれを許したかが問題になる。

おまけにザイツェフは、ゾルゲ情報の信憑性がモスクワで疑われていた1938-40年当時、赤軍第4部GRU本部で日本からの暗号情報を露文に訳し、重要性・信憑性を判断する日本課の暗号解読員で、ゾルゲを監視する立場にあったことが、旧ソ連崩壊で初めて公開されたフェシュン「秘録 ゾルゲ事件」から分かる（白井久也編『国際スパイ ゾルゲの世界戦争と革命』社会評論社、2003年）。ゾルゲとは別に、赤軍第4部が日本に送り込み、秩父宮ら皇室情報に食い込んだ女性諜報員アイノ・クーシネンが、1937年末帰国命令でモスクワに戻った際（ゾルゲにも帰国命令が出たが拒否）、「日本のスパイ」として強制収容所に送り込んだ尋問官の一人がザイツェフであったことも、アイノの戦後の回想から判明した（『革命の墮天使たち』平凡社、1992年）。ゾルゲは、ノモンハン事件の頃からたびたびソ連への帰国願いを出し、1941年6月独ソ戦開始切迫についての情報はモスクワで信用されず、ようやく逮捕直前の御前会議の日本軍南進情報がスターリンにより採用されて、辛くも後に「ソ連邦英雄」になることが出来た。ゾルゲ諜報団は、いわばスポンサーのスターリンとソ連赤軍からも「（露独日）三重スパイ」と疑われ、1941年秋には、四面楚歌であった。

4 川合貞吉はウィロビー＝キャノン機関諜報員で月2万円をもらっていた

しかし、実際のゾルゲ事件検挙は北林トモ逮捕からであり、宮城与徳、尾崎秀実、ゾルゲと続いた。ここから、憲兵隊ではなく特高警察によるゾルゲ諜報団摘発は、北林トモが所属したアメリカ共産党日本人部について特高外事警察がどのような情報を持ち、何故に北林が日本で監視されていたかが問題になる。このことは、宮城与徳訪日の事情、それを送り出した「ロイ」の問題に関わる

ので後にまわし、尾崎秀樹が終生自説形成の最も信頼できる仲間であり生き残り証人として扱った川合貞吉の役割について述べておこう。

尾崎秀樹が宮城与徳について最も詳しく探求しまとめた『越境者たち』は、「私が宮城与徳の存在を身近なものに感じるようになったのは、川合貞吉を通してであった」と書き出されている。これは、フィクションとしてならいいが、歴史研究としては全く信用できないことを、告白したようなものである。なぜならば、尾崎秀樹が兄代わりの師として慕った川合貞吉のゾルゲ事件に関する証言は、この間渡部富哉氏が川合『或る革命家の回想』の記述と史実の矛盾を衝いて詳しく述べてきたように（ウェブ上のちきゅう座「川合貞吉の供述と著作『ある革命家の回想』とスメドレーに関するアリバイの実証的研究」http://chikyuzu.net/n/index_ligne_wa）、特高警察とGHQ/G2ウィロビー報告の筋書きには適合的であるが、伊藤律端緒説を始め、全体が虚偽と自己保身に彩られた作り話になっている。川合貞吉こそ、実は「生きているユダ」であり、川合を「唯一の生き残り証人」として扱い主たる典拠としてきた戦後日本のゾルゲ事件研究は、砂上の楼閣である。

このことを私は、2年前にアメリカ国立公文書館で見つけたMIS「川合貞吉ファイル」から実証し、ゾルゲ・尾崎墓前祭講演で公表した（<http://homepage3.nifty.com/katote/09Sorge.htm>）。そこには、ちょうど米国から日本に来ていた米国歴史学会前会長・入江昭ハーバード大学名誉教授や日独関係史の専門家三宅正樹明治大学名誉教授らも同席していた。

1947年9月12日から51年7月31日までの米国陸軍諜報部MIS「川合貞吉ファイル」には、川合がGHQ/G2ウィロビー傘下の「キャノン機関」に情報を提供していた記録が収録されていた。ゾルゲ事件の生き残り証人である川合貞吉に対する米側の主たる関心は、上海におけるスメドレーに関する彼の個人的な知識と記憶にあった。川合の情報提供先、G2の担当官は、戦後、八ヶ岳山麓清里を開発し、アメリカンフットボールの日本への紹介者としても知られるポール・ラッシュだった。二人のツーショット写真も入っていた。

川合貞吉は、中国でアグネス・スメドレーと会い、尾崎とゾルゲ、スメドレーの関係を知って生き残っている唯一の日本人というのがセールスポイントだった。川合の1949年2月28日の証言では、ゾルゲ・リンクを「売った」共産黨員として、伊藤律とともに松本（真栄田）三益の名をあげ「松本の方がより責任がある」とも述べていた。しかし米国側は、当時の日本共産党に打撃を与えるためには松本三益カードより伊藤律カードの方が効果的と見て、伊藤律端緒説を採用した。

ただし米軍内では、川合情報はどうも疑わしいという意見が出ていた。本郷ハウスのキャノン機関は、川合に対して毎月55ドル、円換算で2万円を渡していたが、「払い過ぎだ、差し当たり1万円に減らして、彼から情報提供を受ける線を切った方がいい」と、川合担当の情報将校が言い出した。

「川合の情報は月2万円の価値に値しない。もう一つ、どうも日本共産党は彼を信用していないらしく日本共産党の内部情報が入ってこない、だから2万円を減額して1万円にすることにした」という報告文書が、1950年2月20日に出されている。

川合は、米軍から毎月2万円の情報提供料をもらいながら、尾崎秀樹と一緒に1948年末に「ゾルゲ事件真相究明会」を立ち上げ、「伊藤律＝ユダ＝スパイ説」を流布した。そのバックに、ウィロビーとキャノン機関があった。ウィロビー報告は、1949年2月10日、この年1月総選挙で共産党35議席に躍進、3月ドッジライン、4月団体等規制法、7月下山・三鷹事件、8月松川事件、10月新中国誕生である。ウィロビー報告も戦後の伊藤律端緒説も、ウィロビーと川合により作られたストーリーである。したがって戦前から戦後の川合貞吉証言は、全部疑わしい。

5 宮城供述の米国共産党日本人部「オモテの顔」は日本官憲の作文である

それでは、宮城与徳を日本に送り込み、北林トモ逮捕の手がかりとなった米国共産党日本人部とは、どのようなものであったのか。この問題でのこれまでの研究の欠陥は、戦前特高警察の得た宮城与徳の供述・手記の内容をそのまま事実と見なし、せいぜい当時の米国共産党員カール米田、ジェームズ小田、芳賀武らの戦後の回想で補って、そこから宮城手記に出てくる1931年秋「矢野某」の勧めによる入党、「矢野」と「白人の男」による日本帰国の指示、「ロスアンゼルス居住の米国共産党員ロイ」によるゾルゲとの連絡命令を、あれこれ詮索してきたことである。

当時のアメリカ共産党とコミンテルン第6回大会（1928年）後の16の言語別組織、日本人部の歴史的変遷については、拙著『ワイマール期ベルリンの日本人』（岩波書店、2008年、157頁以下）、及び拙稿「体制変革と情報戦」に概略を述べてある（岩波講座『「帝国」日本の学知』第4巻所収、2006年 <http://members.jcom.home.ne.jp/0720394511/TeikokuJohosen2006.pdf>）。1930年代の米国共産党は、二つの顔を持っていた。一つは、通常思い浮かべる、大恐慌下での労働運動、日本語新聞発行、スペイン戦争国際義勇軍から第二次世界大戦への米国市民としての反ファシズム参戦の流れを指導する、基本的には米国内19地域に分かれた第13区委員会（カルフォルニア）の指導下にある「オモテ」の顔である。だがすでに、1929年12月21日のスターリン50歳誕生日を目に見える転換点にして、世界革命をめざす共産主義者の国際連帯として生まれたコミンテルン（共産主義インター、第3インター、1919-43年）は、「労働者の祖国」ソ連を防衛する国際ネットワーク、端的にはソ連国家の安全保障・外交政策に規定され従属する組織に転態していた。

そのため米国共産党は、米国内政治・労働運動ではとるに足らない存在であり続けながら（最大時1939年10万人）、モスクワにとっては、特別に重要な意味を持つにいたった。世界中から移民・難民・出稼ぎ労働者・亡命者の集まるアメリカは、ソ連国家の必要とする国際工作の格好の供給源で、現地語と英語ができる国際活動家のリクルート・人材派遣を引き受けることになった。

アメリカ共産党の組織全体が、それに合わせて、伝統的労働運動の指導者W・Z・フォスターらは「オモテの顔」に棚上げされ、汎太平洋労働組合（PPTUS）の特殊工作を中国で経験したアール・ブラウダーを書記長に、PPTUS出身のサム・ダーシー、スティーブ・ネルソンらが重用され、それをモスクワ派遣の米国共産党コミンテルン代表＝指導・監視役のゲアハルト・アイスラー（上海で一時ゾルゲと一緒に）、米国共産党の「ウラの顔」の手配師ルディ・ベーカー、言語局長M・ブラウンらが支えた。米国共産党の「ウラの顔」とは、ソ連国家・ソ連共産党の要請に応じてアメリカから世界に工作員を送り出す、コミンテルンの秘密機関国際連絡部（オムスOMS）に直結する活動だった。その要員を育成するために、一般党活動の党労働学校 Land School のほか、秘密党幹部養成学校 National Training Center が設けられていた。さらにそこで抜擢された能力ある党员には、モスクワのクートベ（KUTV 東洋勤労者共産主義大学）や中国革命用の孫逸仙大学（莫斯科中山大學）、中東欧革命用の西洋少数民族共産主義大学（KUNMZ）への留学の道が開かれ、さらに最高幹部養成のためには、モスクワ・レーニン大学で訓練されるエリート党员もリクルートされた。

宮城与徳の入党する1931年段階の米国共産党日本人部は、千人規模の党员を持つフィンランド人部、ユダヤ人部などに比べれば、党本部に報告された党员45人、影響下220人という、極小言語部であった。16の各国言語部は米国共産党中央委員会書記局の直轄で、書記は党本部の任命、各言語部書記局も原則としてニューヨークにおかれた。書記局のもとに連邦内の同一言語使用者が

横断的に組織され、19 の地域別党委員会よりも上位にあり、必要に応じてモスクワのコミンテルン執行委員会地域別担当部（日本語や中国語は東洋部）と直接連絡することも可能であった。

サンフランシスコ、ロサンゼルス等カルフォルニアの日本人共産主義者は、米国共産党第 13 区（カルフォルニア地域支部、書記長サム・ダーシー）の工場細胞・街頭細胞に所属しながら、多くは第 2 区（ニューヨーク州）にある党本部直轄の言語別書記局である日本人部にも一応登録される。「オモテの顔」での日本人指導者は、1920 年代は健物貞一、堀内鉄次らで、彼らは西海岸のアジア系労働者運動組織化のさなか、なぜか半年ほどニューヨークに行って戻ってくる。ニューヨークの中央党学校 Land School で訓練を受けていたのだろう。1925 年創刊の健物らの雑誌『階級戦』の流れに、沖縄青年会・黎明会出身者の多くが、羅府日本人労働協会、ILD（国際労働者救援会）やプロレタリア芸術研究会を通じて加わり、1929 年 10 月全国規模の日本人労働協会結成、『労働新聞』刊行にいたる。ただしこうした「オモテの顔」の指導者は、度重なる FBI・移民局・州警察の弾圧で検挙され、32 年 1 月ロングビーチ事件を機にソ連に亡命、スターリン粛清犠牲者となる。戦後日本で一部に知られたカール米田やジェームズ小田が活躍するのは、その後のことである。

宮城与徳の場合は、黎明会や ILD に関わっていたとはいえ、画家であり、目立つ活動家ではなかった。宮城与徳の第 29 回検事訊問調書（1942 年 4 月 1 日）によると、宮城は 1930 年末にモスクワ帰りの矢野某（矢野努、本名豊田令助、党名武田・水野ほか多数）の訪問を受け、1 年後の 31 年秋に矢野の勧めで米国共産党に入党、第 13 区の「オモテ」活動には加わらず（「加入に際しても私はアメリカ在住の所謂日本人共産主義者と行動を共にせず、真面目に民族運動として共産主義運動を実行する決心で其ことは矢野某にも了解を得て居りました」）、さらに 1 年後の 32 年末に矢野と「白人のコミンテルンの男」が東京行きを指示、実際の出発はさらに遅れ 33 年 9 月出発、10 月末横浜着である。これは、宮城が「ウラの顔」から国際工作要員としてリクルートされ、ゾルゲ諜報団に送られたことを意味する。実際、入党後の約 2 年の宮城与徳の自分自身の活動についての供述は乏しく、空白になっている。

いや宮城の訊問調書にも手記にも、この期の米国共産党「東洋民族課日本人部」の詳しい供述があるのではないかという人は、尾崎秀樹や野本一平を含め、米国共産党史を真剣に研究したことがないことを告白しているようなものである。結論的に言えば、宮城は米国共産党の「オモテの顔」についてよく知らず、「ウラの顔」の一部のみを知ったうえで、日本に派遣された。宮城供述・手記のやや詳しい米国共産党と日本人部の歴史は、当時の日本外事警察が収集しえた限りでの「オモテ」の情報であり、それを宮城に一一おそらく拷問をも加えて一一訊問し、自分自身の知り得たことにさせて、サインさせたものにすぎない。例えば米国共産党には、「東洋民族課」など存在しない。それは日本人部書記局がコミンテルン東洋部と直結していたことの混同であり、宮城ではなく、日本特高外事警察の調査の限界である。宮城は「日本人部」だから「民族運動として共産主義を実行」と言わされているが、日本人部の「ウラの顔」に属する活動は、民族運動どころか民族の違いを越えて国際活動に従事することであった。宮城の語る入党時期も含め、33 年秋日本入国までの真実は、モスクワにあると思われる宮城与徳の党個人資料・PPTUS 資料により、再検討しなければならない。今回モスクワから出席するエレナ・カタソノワ女史が、発見・持参することを期待する。

では、宮城手記・訊問記録の多数の黨員名を含む詳しい米国共産党日本人部の歴史は、どこからきたのか？ これも、今日では膨大な復刻版が出ている戦前日本の特高警察資料・司法資料・思想取締資料など官憲史料を、渡部富哉氏にならって丹念に読み込めば簡単に分かる。要するに、1941

年までに日本官憲の知り得た米国在住日本人共産主義者の記録を事件立件に都合のいいようにまとめ、宮城の口から出たように強要し、ゾルゲ事件と平行ないし継続する他の共産主義者・自由主義者への弾圧——企画院事件、合作者事件、第一次・第二次満鉄調査部事件、中共諜報団事件、横浜事件——へと広げる布石であった。特高のいう「米国共産党東洋民族課」とは、宮城の米国共産党日本人部供述をも手がかりに、中国や満州で侵略戦争に反対する日本人・朝鮮人・中国人を「アカ」として一網打尽にするためのフレームアップであり、宮城与徳に責任あるものではない。

では、この特高による米国共産党日本人部の情報源は何か。主要には、宮城与徳検挙以前に日本の特高警察が得た、米国共産党・社会主義運動関係者からの供述、及び、在米日本大使館・領事館がFBI等から得た米国側共産主義取締・弾圧の記録である。

日本政府は、古くは1908年『社会主義者沿革 第1』以来、在米日本人を含む在外社会主義者の動向を、注意深く監視してきた。大正期にも『特別要視察人状勢一覧』『社会運動の状況』、内務省警保局『在米社会主義者・無政府主義者沿革』、外務省「在米邦人社会主義者の状況」（1909年）、内務省警保局「米国在留特別要視察人ノ状況大要」（1918年）、内務省警保局「在外邦人過激主義者ノ状況」（1922年）等がある。特に関東大震災後の『外事警察報』には、第51号（1925）「亜米利加共産党の7年間」、第94号（1930年）「米国共産党の運動概況」、第113号（1931）「米国下院共産運動調査報告書」等があり、日本人の加わった米国共産党全体の動向に注目していた。

ただし、在米日本人共産主義者個人に特化した先駆けは、『外事警察報』第106号（1931）の「米国に於ける邦人共産主義者の審問」という記事で、バークレーの活動家小林勇が、1930年9月30日にサンフランシスコで移民官により逮捕され、30年12月に労働長官の送還命令を受け、ソ連に出国したことが注目された。以後1930年代は、『外事警察概況』『特高月報』『特高外事月報』『外事月報』『外事警察報』『外事警察資料』『思想月報』『思想研究資料』『社会運動の状況』などで、米国共産党日本人部の活動がほぼ毎年記録され、今日ゾルゲ事件や野坂参三の研究で用いられる日本官憲作成「党員名簿」まで出てくるようになる。

ゾルゲ事件と宮城与徳との直接的関わりでは、「第60 議会参考資料 極秘」と刻印された1931年末内務省警保局「昭和6年中に於ける外事警察概要 欧米関係」が重要で、今日では、荻野富士夫編・解題『特高警察関係資料集成』第16巻（不二出版、1992年）で読める。これは、1930年秋に上海で尾崎秀実とリヒアルト・ゾルゲを結びつけた謎の日本人で米国共産党員（実は日本人部初代全国書記、後述）鬼頭銀一が、31年9月に上海領事館警察に別件で捕まり（ゾルゲ・尾崎秀実との関係ではなく、治安維持法違反容疑者木俣豊次逃亡幫助容疑）、米国での活動について供述した記録にもとづく。鬼頭銀一、健物貞一、小林勇ら16名を米国共産党員として挙げた。これが、以後の日本側による米国共産党員名簿作りの出発点となった。鬼頭は32年末保釈後、上海から帰国した大阪朝日の尾崎秀実と再び親交を結び、神戸「鬼頭商会」でゴム販売業に従事、1938年5月南洋パラオ・ペリリュー島で謎の食中毒死を遂げる。ゾルゲ事件の本当の端緒は1930年の鬼頭を仲介にしたゾルゲと尾崎秀実の出会いであったが、事件発覚時に鬼頭は既に死亡していたため、裁判記録ではスメドレーの紹介に統一された。今回は宮城与徳の報告なのでこの点は省略する。

1933年末「昭和8年中に於ける外事警察概要」（『特高警察関係資料集成』第16巻）が、おそらく北林トモ帰国後の監視・検挙の基礎資料になったものである。これは「米国共産党羅府支部所属団体表」約40団体と主な活動家名、「在羅府日本人共産主義者及シンパ表」をニューヨーク、ハワイと共に約200人分を載せ、その中に、「党員票番号44 北林トコ 第35街細胞」「（番号不明）

宮城（街区不明）」が出てくる。北林、宮城の名の、日本官憲文書への初登場である。

これが1936年『外事警察概況』の米国共産党日本人部分析ではいっそう拡大され、日本で荒畑寒村と会ったサンフランシスコ金門印刷所岡繁樹の供述をもとにして、「米国共産党の組織概要」「対日宣伝」「米国共産党第13区所属日本人支部の結成経過」「米国共産党並に日本人部発行の各種機関紙、定期刊行物」「米国共産党日本人部関係邦人の検挙」「海外よりの左翼宣伝印刷物発見状況」が、実に80頁以上に渡って詳細に報告される。

さらに、1936年末に米国からソ連に亡命していた元米国共産党活動家小林勇、37年末にはドイツ共産党経由でソ連に亡命していた「コミンテルンの密使」小林陽之助が、日本に潜入してほどなく検挙される。おそらく苛酷な拷問をもとに、ソ連・ドイツ・アメリカ・日本を結ぶ国際連絡の仕組み、コミンテルン国際連絡部(OMS)のパスポート偽造や暗号、連絡ポストまで詳しく供述する。いずれも、在モスクワの野坂参三・山本懸蔵の指示による帰国で、モスクワとの連絡はカルフォルニア経由となっており、モスクワと直結する米国共産党日本人部の「ウラの顔」の一部が日本官憲に露呈してしまった。もともと日本官憲は、1935年袴田里見検挙で日本共産党中央委員会を壊滅させたものの、アメリカから海上ルートや郵送で持ち込まれた『国際通信』『太平洋労働者』等左翼文献流入に悩まされていた。カルフォルニアの米国共産党日本人部は、その拠点と見なされた。

そこで、米国FBIの取締記録も、在米日本大使館・領事館を通じて取り寄せた。「在米日本人共産主義者名簿」は、数種類作られた。ゾルゲ事件研究者によく知られているのは、カール米田が1971年に米国スタンフォード大学フーバー研究所で発見したという、内務省警保局長から各府県長官宛「1938年8月31日付警保局外発用第111号 極秘 米国加州地方邦人共産主義者ニ関スル件」という資料で、47名の氏名・通称・党名、年齢、住所、職業、入党年、党員証番号、任務が掲げられている。今日では、外務省外交史料館「外務省亜米利加局 各国共産党関係雑件 米国ノ部3 (昭和9-16年)」や国立国会図書館憲政資料室に2005年に入ったUCLA図書館所蔵「カール・ヨネダ・ペーパーズ」で容易に閲覧できる。

P・ランガー＝R・スウェアリンゲン共著『日本の赤い旗』（コスモポリタン社、1953年、原書1952年）には、1939年内務省作成の「在米邦人思想被疑者」400名のリストがあると述べられていた（99頁）。それはおそらく、今日米国国立公文書館で公開され、昨年私がコピーをして日露歴史研究センターに提供したFBIの1934年5月作成「ロサンゼルス地区米国共産党名簿」を元にしたものであろう。日系人コミニストが400名以上挙げられ、北林トモは住所付きではっきりと、宮城は「MIYAGI, Y」で宮城与徳か与三郎か分からないかたちで、名前が出てくる。これらのリストをもとに、特高外事警察が出入国記録をあたれば、北林トモのマークは、容易であったろう。

さらにこれまで参照されたことはないが、外務省外交史料館所蔵の「昭和13年4月 管内事情 在紐育日本帝国領事館」の米国共産党・在米日本人調査、「昭和14年7月3日 外事警察事務協議会要録」中の「在外邦人共産主義者」名簿などもあるから、伊藤律や松本三益を持ち出すまでもなく、日本に帰国した在米共産主義運動の体験者は、日米戦争の切迫する1940/41年には、特高警察の厳しい監視下にあったと考えるべきである。

今年のゾルゲ・尾崎墓前祭講演で米軍MIS「秋山幸治ファイル」に関連して述べたように、秋山の戦後の米軍への供述では、宮城与徳の指揮下で和文資料の英訳に関わった秋山以外の「もう一人の女性」が出てくる。これは『現代史資料 ゾルゲ事件4』冒頭に出てくる、「国際共産党諜報機関検挙報告」中で「鈴木邦子」と名前のみ出て裁判記録から抹殺される、当時の警視庁外事課通訳、

戦後GHQ・防衛庁通訳のことである。鈴木邦子が、宮城与徳との「交際」を通じて、宮城与徳や北林トモを密偵していた可能性も排除できない。尾崎秀樹は、『越境者たち』や50周年記念講演で、宮城与徳と北林トモに男女関係があったように述べているが、これは事実とは思われない。川合貞吉の示唆であろう。MIS「川合貞吉ファイル」で、川合は、1949年2月25日のキャノン機関の訊問に、「尾崎秀実の妻と娘は伊藤律の紹介で共産党に入党し、妻は伊藤律とlove affairsの関係にある」という情報を、秘かに売り込んでいた。宮城与徳訪日前の八巻千代との離婚の事情も、改めて検討しなければならない。情報戦の真実は、「オモテ」には出てこないのである。

6 米国共産党の「ウラの顔」から見た宮城与徳日本派遣の真実

ではなぜ、『国際通信』『太平洋労働者』等左翼文献をアメリカから送り出し、1934-38年に2度もアメリカに長期滞在した野坂参三と、それに関係した米国共産党員ジョー小出（鶴飼宣道）、長谷川泰二、ジャック木元（木元伝一）らの活動は、日本側官憲資料からは浮かび上がらないのか？それは実は、カルフォルニアでの西海岸労働運動に「世界革命の夢」を託す一般党員にはほとんど想像もできない、米国共産党の「もうひとつの顔」に属していたからである。

1930年代に米国共産党日本人部の「オモテの顔」で活動したカール米田やジェームズ小田は、戦後になって、自党の闇と矛盾に気がついた。そこで、宮城与徳についても、彼を送り出した「白人の男」はサム・ダーシーかスティーブ・ネルソン、「ロイ」は戦後日本共産党の「オモテの顔」になった野坂参三と推定した。1934-38年滞米時代の野坂の秘密活動の助手をつとめて、時々「オモテ」との連絡に現れたジョー小出こそ共産党員名簿をFBI・日本官憲に売り渡した「スパイ」と妄想した。尾崎秀樹や野本一平は、それらの妄想を信じて「ロイ＝野坂参三」「ジョー小出＝スパイ」説を日本で広める役割を果たした。伊藤律に継ぐ、第二の「生きているユダ」作りである。

だがこれらは、カール米田の遺族が死後UCLA日系移民コレクションに寄贈した「カール・ヨネダ・ペーパーズ」所収の『労働新聞』等米国共産党日本人部の「オモテ」の基礎資料、カール米田の遺稿というべき、日本語手書き「在米日本人共産主義者略史」、英文「Brief Outline: U. S. Japanese Socialists-Communists Prior to and During '30s and '40s」などを仔細に読めば、カール米田やジェームズ小田が、自ら所属した米国共産党の本当の姿を、ほとんど見誤っていたことが分かる。2005年に国会図書館憲政資料室にマイクロフィルムが入り、日本でも検証が可能になった。

そこには、宮城与徳も北林トモもでてこない。野坂参三やジョー小出の第一次史資料はなく、晩年の告発状に恨み辛みが出てくるだけである。米田は「ウラ」を知る立場になかった。また、これら米国共産党日本人部の「オモテ」の活動については、2007年にJosephine Fowler, *Japanese & Chinese Immigrant Activities: Organizing in American International Communist Movements, 1919-1933*, Rutgers University Pressという初めての学術研究書が刊行された。片山潜や健物貞一のアジア系労働者組織化は高く評価されても、カール米田は軽く触れられるのみ、ジェームズ小田は出てこない。無論、ゾルゲ事件や野坂の秘密活動は関係ないものとされている。惜しむらくは著者Fowler女史は本書刊行直後に亡くなって意見交換の機会を失ったが、日本で翻訳されたカール米田やジェームズ小田の著書よりも、この博士論文こそ、今後の研究で参照すべきだろう。

それでは、以上に述べてきた米国共産党日本人部の「ウラの顔」は、何によって分かるのか？ 簡単である。すでにいくつかの論文で述べてきたが、旧ソ連秘密文書中のアメリカ共産党関係文書は、

今日米国議会図書館やスタンフォード大学フーバー研究所などで公開されている。モスクワよりも容易に、コピー代も安価に入手できる。そこから日本人部関係文書を抽出するのは容易ではないが、私は5年ほど前に天皇制問題を追いかけて、ほぼ収集できた（加藤『象徴天皇制の起源』平凡社新書、2005年）。そのほかに、この時代の共産主義運動については、米国国立公文書館所蔵の膨大なFBI/OSS/CIA/MIS文書・ファイルがある（日本関係約10万頁）。何よりも、米国におけるソ連型共産主義運動の「ウラの顔」そのものを暴いた学術研究書が、いまや英語で10冊以上刊行されている。とりわけ、その基礎となるソ連の米国内諜報活動を収集・分析した『ヴェノナ』、コミンテルンとアメリカ共産党の関係文書を編んだ『アメリカ共産党とコミンテルン』は、邦訳も出ている。

前者『ヴェノナ』（PHP研究所、2010年）の暗号解読に出てくる日本人は、宮城与徳と矢野努、ジョー小出である。ジョー小出は、サンフランシスコの『ウォールストリート・ジャーナル』記者ウィリアム・クレーンにより英語の教育を受けたと出てくるだけであるが（邦訳322頁）、そのクレーンは、アイザック・フォルコフと共に、「アメリカ共産党秘密機関の独立カルフォルニア分局」を1930年代初頭に立ち上げ、西海岸全体の地下活動＝「ウラ」を指導していたという。

宮城与徳は「ソ連の海外諜報任務に携わっていたアメリカ共産党員」であったとされ、「日系人の矢野」が「ソ連の情報機関を支援するためのエージェント」として宮城を「徴募し、1933年に日本へ向け送り返した」、「宮城はゾルゲの主だった助手の一人だったが、彼のアメリカ共産党での過去の経歴が、ゾルゲ・スパイ網が摘発されるきっかけとなった。1940年、日本の治安警察は、日本に戻った在外居住経験者の中に共産主義者がいないかを捜査し始めた。捜査の結果、宮城とほぼ同時にロサンゼルスでアメリカ共産党に加入し、宮城を同僚の共産党員として知っていた人物が浮上した。日本の警察はこの情報をもとに宮城を監視下に置き、1941年10月に彼を逮捕した」と記している（119-120頁）。後者『アメリカ共産党とコミンテルン』（五月書房、2000年）もほぼ同じ評価であるが（95-96頁）、後者には野坂参三の「野坂機関」と米国共産党書記長アール・ブラウダーとの交信、PPTUS関係など10点以上の日本に関わる「ウラ」の記録が、暗号まじりで出てくる。

これらに、英国で公刊されたソ連の諜報活動を解読した『ミトロキン文書』、英国国立公文書館所蔵の在日ドイツ大使館関係文書、それに20年前でも一部は利用しえた日本関係旧ソ連秘密文書、日本側官憲文書の復刻版を重ねれば、尾崎秀樹にも、宮城与徳の日本派遣とゾルゲ事件を、全く別のかたちで見直すことが可能であったろう。旧ソ連内務人民委員部NKVDの最高幹部であったスドプラトフ将軍の回想『KGB 衝撃の秘密工作』では、スターリンの指令によるトロツキー暗殺計画の総責任者として知られるスドプラトフ将軍が、その工作「オペレーション・ダック」で1940年の実行犯メルカデルらを指揮したレオニード・エイチンゲンの前歴について述べる箇所、1930年代初めにアメリカに送られたNKVD非合法工作員であった「エイチンゲンが徴募した工作員の一人に有名な日本人画家宮城がいる。彼はのちに東京でゾルゲ・チームに加わった」という、短い重要な証言を残している（木村明生訳、ほるぷ出版、1994年、上巻148頁）。

残念ながら、晩年の尾崎秀樹は、川合貞吉と共有した青春時代の体験に固執し、冷戦崩壊・ソ連解体という歴史的現実、正面から向き合うことなく没した。

こうしたこの20年の第一次史資料公開、新たな諸研究と、私の外野席からのゾルゲ事件関係文書瞥見から、尾崎秀樹の見逃した宮城与徳の訪日事情を、以下に結論だけまとめておこう。

第一に、宮城与徳訪問調書・手記中の米国共産党関係の記述は、ほとんど日本の特高警察の作文で典拠にはできない。宮城個人に関わる供述の「白人の男」は、当時汎太平洋労働組合PPTUSサン

フランシスコ支部長で、アジアへの「ウラ」工作の実務を統括していたハリソン・ジョージであろうが、その背後がアメリカ共産党書記局であったか、NKVDエイチンゲンであったか、さらに上部であったかは、おそらく指令を受けたハリソン・ジョージも矢野努も宮城与徳も知らなかった。だから宮城与徳は、コミンテルンであろうと信じた。尾崎秀実の場合を含め、旧ソ連秘密文書の更なる公開・解読によってのみ明らかになるだろう。

問題の「ロイ」は、野坂参三ではありえない。ハワイ出身のジャック木元＝木元伝一であった。PPTUSハリソン・ジョージのもとでは、ちょうど宮城与徳の日本派遣期に、ジョー小出＝鶴飼宣道がモスクワのレーニン学校から帰国して、野坂参三訪米の地下活動準備に入る。代わりにジャック木元がモスクワに送られる。「ロイ＝木元伝一」説は、旧ソ連秘密文書から渡部富哉が最初に唱えたが、私も、モスクワのレーニン学校「木元伝一ファイル」、及び米国MISのウィロビーによる「ロイ＝木元伝一」追跡記録から、ほぼ間違いないと確認できた。むしろ、ゾルゲの日本赴任（これは『天羽英二日記』1933年9月12日で確認できる）前の1933年7-9月アメリカ滞在時、宮城与徳本人、ないしハリソン・ジョージ、ジョー小出、木元伝一らが、日本工作についてゾルゲと事前に打ち合わせる機会が本当になかったかどうか、検証すべきである。ゾルゲの検挙後の調書・手記も、情報戦の一環として作られたことはいままでのまではない。裁判記録は、鶴呑みにはできない。

第二に、野坂参三は、宮城訪日後の1934年春にアメリカに入り、コミンテルン国際連絡部(OMS)系列の対日工作に従事するが、ゾルゲ諜報団（ゾルゲ機関および尾崎秀実機関）とは、直接の関係を持たない。1931年6月上海「ヌーラン事件」以後、ソ連のアジア工作は、モスクワのクーシネン、マヌイルスキー、ピヤトニツキー、ディミトロフらを介して、一時的にドイツから、ヒトラー政権成立後はおおむねアメリカ経由で、米国共産党書記長アール・ブラウダー、同秘密連絡担当ルディ・ベーカー、コミンテルン派遣代表ゲアハルト・アイスラーらの手で進められた。

その前線基地は、サンフランシスコの汎太平洋労働組合PPTUS＝ハリソン・ジョージで、東京ゾルゲ機関の結成、在米野坂機関、在中国アグネス・スメドレーらの活動は、モスクワから米国共産党書記局経由の別々の工作として進められ、それぞれの横断的つながりはなかった。ゾルゲ機関最末端の宮城与徳は、野坂機関とは別のオペレーションで、ただ初発でハリソン・ジョージやジャック木元が実務的に関わった限りで、巨大な「ウラ」の活動——『ヴェノナ』を見ると共産党活動歴のない「ソ連スパイ」が多数存在した——の諸工作と交差し、その一つに連なっていた。

なお、ソ連の対日工作も対中工作も、ルートがひとつということはいえない。赤軍GRU・内務人民委員部NKVD・外務省・コミンテルンOMSといった公式（諜報）機関の多元的競合ばかりでなく、それぞれの内部でも、複数ルートの競合・相互監視があった。モスクワにとっては、例えば中国共産党中央特科（周恩来、藩漢年ら）も、多数の持ち駒のうちの一つだった。

したがって、戦前・戦中日本でのソ連の諜報活動も、ゾルゲ・尾崎秀実・宮城与徳・クラウゼン・ブーケリッチのラムゼイ機関のみとするわけにはいかない。赤軍第四部指揮下のゾルゲ機関とアイノ・クーシネンについてはある程度知られているが、三宅正樹教授が『スターリンの対日情報工作』（平凡社新書、2010年）で戦後ラストボロフ事件まで続くと認定した「エコノミスト」こと外務省職員高毛礼茂（作家西木正明は天羽英二説）、富田武教授が最近発掘したハルピン憲兵隊本部通訳阿部幸一（富田武「露語通訳アベの謎を解く」）のほかにも、これまで全く知られていないルートがあった可能性も否定できない。これはソ連ばかりでなく、アメリカのCIAについても言えることで、今日の福島原発の悲劇の淵源に正力松太郎とCIAとのつながりがあったことは、ようやくここ

数年でわかってきたことである。「最もすぐれたスパイは摘発されることはない」事例は、ゾルゲの上海時代の助手で、ソ連の原爆スパイ＝英国人クラウス・フックス獲得でゾルゲ以上の「ソ連への貢献」を果たしたソーニャ＝ウルズラ・クチンスキーの生涯からも、見出すことができる。

第三に、宮城与徳は、「空白の二年間」—入党から日本派遣まで—のどこかで、諜報員の専門教育を受けていたと思われる。ソ連のレーニン学校やクートベとは考えにくいので、それは「ウラの顔」活動家養成専門の、ニューヨーク州キングストンにあったという「ナショナル・トレーニング・センター」であろう（ルイス・フランシス・ブデンツ『顔のない男達—アメリカにおける共産主義者の陰謀』ジープ社、1950年）。健物貞一、堀内鉄次らが訓練を受けた「オモテの顔」幹部用ランド・スクールではない。その時期は、「ヌーラン事件」で上海の第一次ゾルゲ機関が撤退し、新たな陣容で東京でのゾルゲの活動がモスクワで決定された、1933年の数ヶ月程度の期間であったろう。そこでは、アメリカでも日本でも、公然たる共産党員とは接触しないよう教育されたはずである。

詳細は省くが、米国議会図書館所蔵アメリカ共産党記録の第一次資料で追うと、ニューヨークの米国共産党日本人部の全国書記は、1928年初代鬼頭銀一、29年「内田」ことジョー小出、30年「二宮」こと長谷川泰二と、ほぼ毎年変わる。有能な活動家で英語のできる若者は、次々に対外工作活動ないしモスクワでの上級訓練に送られ、「ウラの顔」の世界に引き抜かれていった。なお、以下は、膨大な英文・露文資料中からの日本人部関係文書の抽出で、ほとんどが党名・偽名で書かれている党内文書からの解読のため、あくまで暫定的なものであることを、断っておく。

宮城与徳が入党したとされる1931年の日本人部全国書記は、日本人・日系人ではない。「フランコ・ピラート」というラテン系の名前である。32年のG. Seki書記時代に、ニューヨークからカルフォルニアへの書記局移転が提案され、サンフランシスコかロスアンゼルスかが問題になる。それまでは書記局とカルフォルニアの連絡係にすぎなかったクートベ帰りの矢野努＝豊田令助は、33年初めの日本人部書記局ロサンゼルス移転に伴い、初めて全国書記に任命され、宮城与徳を日本へ送り出す。ところがニューヨーク時代の「ウラ」中心の日本人部が、カルフォルニアで「オモテ」の活動（『労働新聞』編集等）をも指導・担当しなければならなくなって、ニューヨークの党本部言語局と、ロサンゼルス日本人部書記局で、財政問題等紛争がおこる。そこに『労働新聞』編集長になったカール米田が介入し、日本人部書記矢野努をブラウダー書記長に直接告発して、日本人部内部の権力争いに突入する。背後に一世・二世・帰米の国籍間・世代間対立がある。

1936年までの党内文書で確認できる限りでは、カール米田は、最高指導者＝全国書記になったことは一度もない。おおむね反対派である。ジェームズ小田は、時に調停派として現れ、沖縄出身と思われる仲村幸輝、上里良光が、34年秋「矢野問題」決着＝豊田令助「追放」後の全国書記になる（35年Hata こと仲村、36年Yamatoこと上里）。この頃日本人部は「ウラ」の活動とは切断される。

党内報告文書で見ると、日本人部の最大党員数は、1934年3月報告書の102名で、日本の特高警察やFBIの挙げた200人・400人は、共産主義を恐れるあまりの過大評価であった。

これらの過程に、1934年3月にモスクワを出発してアメリカに密入国した野坂参三やその助手ジョー小出＝鶴飼宣道が直接関わった党記録文書はない。野本一平は、大森実『祖国革命工作』（講談社、1981年）のジョー小出回想から矢野「追放」を1933年末とし、「ロイ＝野坂参三」説にこだわったが、党内文書で見ると、矢野努「追放」劇は、宮城与徳・野坂参三とは関係しない。矢野の「除名」による決着でもなく、矢野対カール米田の日本人部頂点の内紛に手を焼いた、ニューヨークの党本部の介入による矢野の配置転換＝第14区（ワシントン州）シアトル地区への転勤であった。

時期は1934年5月以降で、「ロイ＝野坂参三」説は成り立たない。無論、もともと「ウラの顔」の
党员で、日本でゾルゲ・尾崎秀実との活動を開始していた宮城与徳は、それらを知る由もなく、知
る必要もなかった。

そして、不気味な謎が残されている。米国共産党日本人部指導者で、「ウラの顔」から出発して、
「オモテ」にも現れ「追放」されたのは、武田こと矢野努＝豊田令助ただひとりである。「矢野某」
は、宮城与徳入党・日本派遣の、実務上の担当者であった。これまでのゾルゲ事件研究は、「白人
の男」や「ロイ」の正体の追究には熱心であったが、「オモテ」の記録にもたびたび現れる西海岸
共産党指導者で、1934年以降の行方が曖昧な「矢野某」＝豊田令助のその後を、なぜか追いかけて
こなかった。「ロイ＝野坂」説のジェームズ小田も、「小出＝スパイ」説にこだわったカール米田も、
豊田については多くを語らない。米田は、豊田を「S・水野」という暗号で呼んだり（『がんばっ
て』大月書店、1984年、132頁）、1950年マッカラン法による「元共産党员」日本送還リストに「豊
田令助（矢野努）」と目立たぬように書き込むだけで（『在米日本人労働者の歴史』新日本新書、1967
年、110頁）、豊田の宮城与徳派遣との関わりについては、「いまだ発表の時期ではない」という思
わせぶりの記述を残すのみであった（同前124頁）。

しかし、戦後占領下でゾルゲ事件に関心を抱いた米国諜報機関、GHQ/G2ウィロビーは、「ロイ＝
木元伝一」と共に、「矢野某＝豊田令助」の重要な役割に注目し、見逃さなかった。豊田令助の1934-50
年期についてはなお不明だが、米国国立公文書館MIS（陸軍諜報部）個人ファイルのリスト中に、
「TOYOTA Reisuke」の名が入っている。つまり、マッカラン法で日本に送還されたいゾルゲ事
件の「矢野某」＝豊田令助は、おそらく日本入国直後に、GHQ/G2の訊問を受けた。

<http://www.archives.gov/iwg/declassified-records/rg-319-army-staff/irr-personal-t.html>

その記録の日付が1951年10月23日であることは、資料を請求してみると分かる。宮城与徳手記の
「白人の男」や「ロイ」について、確実に証言できるのは、獄中で没した宮城与徳本人を除けば、
「矢野某」＝豊田令助以外にはいない。米国諜報機関は、それを知り得た可能性がある。

にもかかわらず、私がここ数年、毎夏米国国立公文書館で「TOYOTA Reisuke」ファイルを請求し
ても、「ACCESS RESTRICTED」という一枚の紙が入っているだけである。MISでは、昭和天皇裕仁フ
ァイルや岸信介ファイルと同等の扱いで、未だに米国国家機密に関わるVIP扱いなのである。

宮城与徳が誘惑され、内部で活動した国際共産主義の闇の世界は、ようやくヴェールを脱ぎ始め
たばかりである。若い世代の研究者が、沖縄出身カルフォルニア移民の社会運動史とあわせて、ぜ
ひとも解明してほしいものである。（2010/7/30 記、了）